

沖縄の歴史を振り返る

琉球処分とは

いの 美遼
（しがく総合研究所）

上皇陛下は1999年、当時天皇陛下ご即位十年に際して、次のようにご発言された。

「私が沖縄の歴史と文化に関心を寄せているのも、復帰に当たって沖縄の歴史と文化を理解し、県民と共有することが県民を迎える私どもの務めだと思ったからです」。

また、今上陛下も2022年、お誕生日に際しての会見で、「これからも、多くの人が沖縄の歴史や文化を学び、沖縄への理解を深めていくことを願っています。」と沖縄への

お心を述べられた。

2022年5月15日は、沖縄本土復帰50年である。節目を迎え、沖縄の歴史を振り返るにあたり、本稿では「沖縄の原点」となる琉球処分に焦点を当て述べていく。

◆琉球処分のネガティブな印象

はじめに琉球処分とはなにかをご存じだろうか。「処分」という単語からは、捨てる・

消滅させるなど、否定的な印象を受ける。そして琉球処分の結果だけを見ると、明治政府

が500名弱の軍隊を伴って、琉球藩庁から施政権を奪取し沖縄県を設置したため、琉球が失われたと思う人も多いのではないだろうか。実際、明治政府が日本側のみの意向で、武力にまかせ琉球王国を強制的に併合したと見解を述べる人もいる。

しかし、「処分」という単語には、前述した以外にも、取り扱いを決めて物事の決まりをつけること、という意味もある。そのため、言葉の一般的なイメージだけで判断しないほうが良い。そして全国歴史教育研究協議会の『世界史用語集』には、琉球処分とは「明治政府による琉球王国の日本国への併合にいたる一連の施策」（山川出版社、2018）と記

されている。つまり、琉球処分とはなにかを知るには、一連の施策を見る必要があるのだ。

◆琉球処分は琉球を 存続させるためだった

琉球処分の発端は、1871年の宮古島島民遭難事件である。琉球の民が宮古島から那覇への献税を運搬する際、一隻の船が暴風雨のために難破し、当時、清の一部であった南台湾の海岸に漂着した。そして原住民に襲撃・掠奪された上、乗客69名中、54名が殺害された事件である。明治政府はこの事件の報復措置として、1874年、明治天皇の名において、陸軍中将・西郷従道率いる約3600人の兵により台湾出兵を遂行した。

これは琉球のために明治政府が動いた証である。その結果、日本は清に賠償金を支払わせ、琉球の民を「日本国属民」と表記することで、条約上琉球が日本の版図に入ることを示した。

1875年からは明治政府による琉球への説得が行われた。帝国主義の時代の中、琉球は以前から明・清と冊封関係にあり、さらに1609年からは島津氏の薩摩藩の支配下に置かれていた。

しかしこの日支両属という状態を続けることは、欧米列強の脅威にさらされ、他国から支配される可能性があった。当時、イギリス・フランス・アメリカなどの艦隊が日本を狙った前線基地として、琉球の植民地化の意図をもって来航していたのである。

台湾出兵のほかにも表れている。1872年に琉球王国を琉球藩としたのだが、その際に明治天皇は、当時琉球王国の国王であった尚泰を、華族という身分に位置づけた。華族は、朝廷に使える公家と同じ身分である。さらにその華族は、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の5段階で構成されるのだが、尚泰はその上位2段目の侯爵という徳川御三家や15万石以上の大々名家がつくほどの位に叙せられたのである。

そして同年、明治天皇は、琉球藩設置に当たり御製もお詠みになっている。

きょうさらにひさしまちりむすびてよ
けふさらに久しき契むすひてよ

いはおにかかるたきのしらひと
いはほにかかる瀧の白糸

そのため、琉球の行政は必要に応じて日本の新制度に順応し、制度を近代化する必要があった。明治政府はこのことを繰り返し説明したが、琉球側が変化に対応することを拒んだため、1879年、処分官・松田道之は軍隊を率いて琉球に入った。しかし、抵抗するかにみえた琉球側だが、ほとんど反抗することもなく首里城を明け渡した。そして、廃藩置県が通達され、沖縄県が設置されたのである。一連の施策をみると、明治政府が琉球を守るため、琉球を存続させるために、沖縄県を設置したということが言えるだろう。

◆天皇のお心

明治政府の沖縄に対する思いというのは、

これからの日本本土と沖縄は瀧の白糸のように、永く絆を結び続けてほしいと願われた歌だ。欧米列強のように、沖縄を支配下に置きたいだけであれば、ここまでする必要はないだろう。台湾出兵や明治天皇の御製からは、明治政府が沖縄を守ろうとする気持ちをもって行動したということがみえてくる。

上皇陛下、今上陛下は沖縄へお心を寄せ、国民にも沖縄に対する理解を願われている。沖縄本土復帰50周年に際して、明治天皇が願った沖縄との絆が今も繋がっていることを知ること、日本国民として沖縄本土復帰50周年の意味を深く感じることができずはだ。